

宇佐2001ロータリークラブからの五所平之助監督関連資料寄贈目録

1. 自筆原稿「当たるも八卦、当たらぬも八卦」～ (200字詰め原稿用紙20枚)
2. 俳句色紙「あまぎ嶺の虹に妻呼び妻と見る／五所平之助」
3. 『お化け煙突の世界～映画監督五所平之助の人と仕事』佐藤忠男編 (ノーベル書房・1977)
4. 『日本映画の巨匠たちI』佐藤忠男(学陽書房・1996) ※「五所平之助」収録。
5. 『映画監督／五所平之助』水谷憲司(永田書房・1977)
6. 『映画を愛する』熊井敬(近代文芸社・1997) ※「五」にこだわった五所平之助監督」収録。
7. 『日本の名随筆 40・顔』市川崑編(作品社・1986) ※五所平之助『椎名麟三の微笑』収録。
8. 『日本の名随筆・別巻 14・園芸』柳宗民編(作品社・1996) ※五所平之助「ひがん花」収録。
9. 『映画監督ベスト101・日本篇』川本三郎編(新書館・2003) ※川本三郎「五所平之助」収録。
10. 『シナリオ』昭和30年10月1日発行 第11巻10号 シナリオ作家協会編(シナリオ作家協会・1955) ※座談会「わが映画の秋」五所平之助・豊田四郎・成瀬巳喜男
11. 『キネマ旬報』昭和52年5月1日発行 第707号 通巻1521号 ※五所平之助「田中さんの思い出」(追悼 田中絹代・その人と作品)
12. 『映画評論』昭和10年8月1日発行 第17巻第8号(映画評論社・1930) ※シナリオ「吹けば恋風」原作・脚色:北村小松 監督:五所平之助
13. 『キネマ旬報』昭和33年2月15日発行 第197号 通巻1012号 ※内田吐夢・五所平之助・今井正「新春一夕鼎談—監督三人京都に語る—」収録。
14. 『名監督メモリアル』飯島正(青蛙房・1993) ※「五所平之助の無声時代から敗戦まで」収録。
15. 『映画の領分～映像としての音響のポイエーシス～』加藤幹郎(フィルムアート社・2002) ※映画はメディアム・クールである～五所平之助論の余白に～」収録。
16. 『濃い人々～いとしの作中人物たち～』群ようこ(講談社文庫・2003) ※「五所平之助『猟銃』死滅したのか、男道」収録。
17. 『写真集・日本の女優』監修／五所平之助・田中純一郎(ノーベル書房・1981)
18. 「鶏はふたたび鳴く」／19. 「大阪の宿」／20. 「宴」 ※以上3点、映画ポスター
21. 「新宿松竹館週報」Vol. 9 No.46 昭和8年11月 ※「愛撫(ラムウル)」あらすじ掲載。
22. 『無声映画鑑賞会 No. 151』昭和46年2月25日発行 ※五所平之助監督作品「伊豆の踊子」鑑賞会。
23. 『三百人劇場映画講座 Vol.3』五所平之助特集(三百人劇場・1987)
24. 「さくら音頭」(1934)の映画館上映チラシ(邦楽座)
25. ビデオ『伊豆の踊子』昭和8年・松竹蒲田(アイ・ヴィー・シー)
26. ビデオ『人生のお荷物』昭和10年・松竹(松竹ホームビデオ)
27. ビデオ『宴』昭和42年・松竹(松竹ホームビデオ)

【合計27点】

映画監督＝五所平之助の世界

ごあいさつ

このたび、宇佐 2001 ロータリークラブの資料提供により、宇佐にゆかりの映画監督・五所平之助の人と作品を紹介する企画展を開催することになりました。

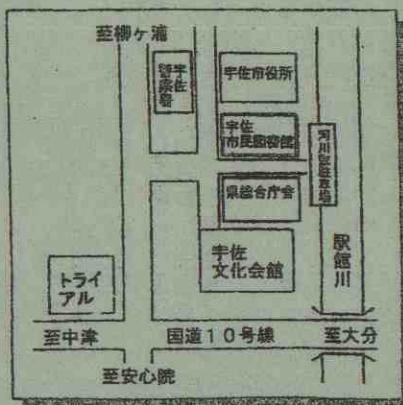
日本初のトーキー映画『マダムと女房』(1931)で日本映画史にその名を残す五所平之助監督。その祖父・惣右衛門は宇佐出身で、明治のはじめ商人にあこがれて東京に出た人物でした。

明治 35(1902)年、東京に生まれた五所平之助監督は、草創期のサイレント時代から戦後の全盛期にかけ、約半世紀にわたり日本映画の第一線で活躍し続け、「抒情派の名匠」「庶民派」「女性映画の名手」と呼ばれました。日本初の本格文芸映画『伊豆の踊子』(1933)や、ベルリン国際映画祭に入賞した『煙突の見える場所』(1953)をはじめ、生涯 99 本の作品を残し、100 本目に『奥の細道』の映画化を夢見て昭和 56 年(1981)、79 歳で生涯を閉じました。俳人としても知られ、辞世の句「花朧ろほとけ誘う散歩道」を残しています。

今回の展示にあわせ、記念の上映会と講演会も開催いたします(2月18・19日)。どうぞこの機会に、映画監督・五所平之助の人と作品の世界をごゆっくりお楽しみください。

平成18年1月7日

宇佐市民図書館／渡網記念ギャラリー  
共催・宇佐 2001 ロータリークラブ



平成 18(2006)年 1 月 7 日 / 編集・発行 宇佐市民図書館

大分県宇佐市上田 1017-1 TEL.0978-33-4600

映画監督  
五所平之助  
の世界



2006.1.7～3.12

10:00～18:00(日曜のみ ～17:00)

休館日＝毎週月曜日・祝祭日・月末木曜日

宇佐市民図書館・渡網記念ギャラリー

共催・宇佐 2001 ロータリークラブ



## 五所平之助プロフィール

1902～81(明治 35～昭和 56)

大正・昭和期の映画監督。東京生まれ。慶応義塾商工学校卒業。  
1923(大正 12)松竹蒲田撮影所に入り、島津保次郎に師事した。31  
(昭和 6)年、日本最初のトーキー映画「マダムと女房」、42「新雪」など  
新鮮な抒情のあふれる佳作をつくった。のち東宝に移り、戦後も「今  
ひとたびの」「大阪の宿」などをつくり、53「煙突の見える場所」はベル  
リン映画祭に入賞した。(『コンサイス日本人事典』三省堂・2004)

### 五所平之助「自作を語る」

(聞き手／白井佳夫・小藤田千栄子)

### 『お化け煙突の世界』収録

うちは公卿のながれで、平将門も先祖らしいんです。平家ですか  
ら、壇の浦で敗れまして、九州の山の中に逃げたんですね。大分県  
の宇佐八幡宮で神主をしてました。宇佐にはいまも墓所があります。  
で、私の祖父にあたります惣右衛門、この人が明治の初め、商人に  
あこがれまして、東京へ出てきたんです。大分県からは福沢諭吉が  
出ていますから、そんな影響もあったのでしょうかね。途中、神戸あたり  
で工業が盛んなのを見て、それでタバコの製造を思いついたようで  
す。煙突から煙が出ているのを見て、キセルから煙が出るというアイ  
ディア。当時、タバコはまだ民営でしたから。それでタバコの製造を習  
い、東京へ出てきて商売を始めたんですね。

そのとき「御所」という姓を「五所」に改めたと、祖父からきいたことが  
あります。ええ、それまで「御所」と書いていたんですよ。でも「ごしょ  
」と読んではおそろしいというので「みところ」と読んでいたこともあった  
とか。それから、タバコの製造を始めるとき、東京・大阪・神戸・博多・  
仙台と、五大都市に店を構えることのできる商人にと、そんなことを念  
願して「五所」とした、なんてきいたこともあります。

## 五所平之助監督作品一覧

大正14年 1925	『南島の春』(松竹蒲田) 『空は晴れたり』(松竹蒲田) 『男ごころ』(松竹蒲田) 『青春』(松竹蒲田) 『当世玉手箱』(松竹蒲田)
大正15年 1926	『街の人々』(松竹蒲田) 『初恋』(松竹蒲田) 『奔流』(松竹蒲田) 『母よ恋し』(松竹蒲田) 『娘』(松竹蒲田) 『帰らぬ笛笛』(松竹蒲田) 『いとしの我子』(松竹蒲田)
昭和元年	『彼女』(松竹蒲田)
昭和2年 1927	『寂しき乱暴者』(松竹蒲田) 『恥しい夢』(松竹蒲田) 『からくり娘』(松竹蒲田) 『処女の死』(松竹蒲田) 『おかめ』(松竹蒲田)
昭和3年 1928	『好きになればこそ』(松竹蒲田) 『村の花嫁』(松竹蒲田) 『道楽御指南』(松竹蒲田) 『神への道』(松竹蒲田) 『人の世の姿』(松竹蒲田) 『街頭の騎士』(松竹蒲田)
昭和4年 1929	『夜の牝猫』(松竹蒲田) 『新女性鑑』(松竹蒲田) 『親父とその子』(松竹蒲田) 『浮世風呂』(松竹蒲田) 『情熱の一夜』(松竹蒲田)
昭和5年 1930	『独身者御用心』(松竹蒲田) 『大東京の一角』(松竹蒲田) 『微笑む人生』(松竹蒲田) 『女よ！君の名を汚す勿れ』(松竹蒲田) 『処女入用』(松竹蒲田) 『大森林』(松竹蒲田・宣伝のみ・未製作) 『絹代物語』(松竹蒲田) 『愛欲の記』(松竹蒲田)
昭和6年 1931	『女給哀史』(松竹蒲田) 『夜ひらく』(松竹蒲田) 『マダムと女房』(松竹蒲田) 『島の裸体事件』(松竹蒲田) 『愚弟賢兄』(松竹蒲田) 『若き日の感激』(松竹蒲田)
昭和7年 1932	『兄さんの馬鹿』(松竹蒲田) 『銀座の柳』(松竹蒲田) 『撮影所ロマンス・恋愛案内』(松竹蒲田) 『天国に結ぶ恋』(松竹蒲田) 『不如帰』(松竹蒲田) 『恋の東京』(松竹蒲田)
昭和8年 1933	『花嫁の寝言』(松竹蒲田) 『伊豆の踊子』(松竹蒲田) 『十九の春』(松竹蒲田) 『処女よ、さよなら』(松竹蒲田) 『愛撫(ラムール)』(松竹蒲田)
昭和9年 1934	『女と生まれたからにゃ』(松竹蒲田) 『さくら音頭』(松竹蒲田) 『生きとし生けるもの』(松竹蒲田)

昭和10年 1935	『花婿の寝言』(松竹蒲田) 『左うちわ』(松竹蒲田) 『吹けよ恋風』(松竹蒲田) 『あこがれ』(松竹蒲田) 『人生のお荷物』(松竹蒲田)
昭和11年 1936	『奥様借用書』(松竹蒲田) 『麗夜の女』(松竹大船) 『新道(前編・朱実の巻)』(松竹大船) 『新道(後編・良太の巻)』(松竹大船)
昭和12年 1937	『花籠の歌』(松竹大船)
昭和15年 1940	『木石』(松竹大船)
昭和17年 1942	『新雪』(大映東京)
昭和19年 1944	『五重塔』(大映東京)
昭和20年 1945	『伊豆の娘たち』(松竹大船)
昭和22年 1947	『今ひとたびの』(東宝)
昭和23年 1948	『面影』(東宝)
昭和26年 1951	『わかれ雲』(スタジオ8プロ=新東宝)
昭和27年 1952	『朝の波紋』(スタジオ8プロ=新東宝)
昭和28年 1953	『煙突の見える場所』(スタジオ8プロ=新東宝)
昭和29年 1954	『大阪の宿』(スタジオ8プロ=新東宝) 『愛と死の谷間』(スタジオ8プロ=日活) 『鶏はふたたび鳴く』(新東宝)
昭和30年 1955	『たけくらべ』(新東宝)
昭和31年 1956	『或る夜ふたたび』(歌舞伎座=松竹)
昭和32年 1957	『黄色いからす』(歌舞伎座=松竹) 『挽歌』(歌舞伎座=松竹)
昭和33年 1958	『螢火』(歌舞伎座=松竹) 『欲』(松竹京都) 『蟻の街のマリア』(歌舞伎座=松竹)
昭和34年 1959	『からたち日記』(歌舞伎座=松竹)
昭和35年 1960	『わが愛』(松竹) 『白い牙』(松竹)
昭和36年 1961	『猟銃』(松竹) 『雲がちぎれる時』(松竹) 『愛情の系譜』(松竹)
昭和37年 1962	『かあちゃん結婚しろよ』(松竹)
昭和38年 1963	『一〇〇万人の娘たち』(松竹)
昭和40年 1965	『恐山の女』(フレンド・プロ=松竹)
昭和41年 1966	『かあちゃんと十一人の子ども』(松竹)
昭和42年 1967	『宴』(松竹) 『女と味噌汁』(東宝=東京映画) 『明治はるあき』(財団法人明治村・一般公開なし)